

THE COFFEE TIMES

Economics

- Coffee -

Society -

Project

TAKE
FREE

Democratic Republic of Congo

V o l .

06

2019

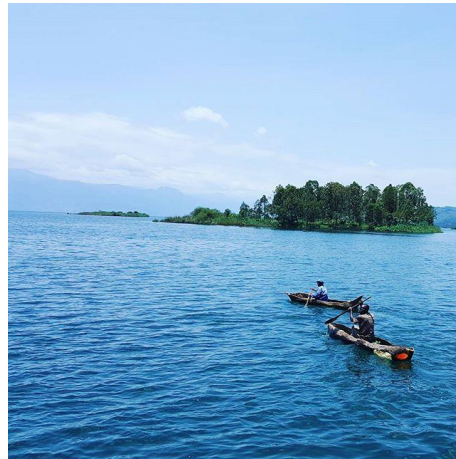
About DR Congo

- ・人口:8,134万人(2017:国連)
- ・首都:キンシャサ
- ・言語:フランス語(公用語)
- ・主要産業:農林水産業、鉱業・エネルギー業、製造業
- ・名目GDP:376.4億ドル(2017:世銀)
- ・経済成長率:3.7%(2017:世銀)
- ・失業率:4.2%(2018:ILO推計)

Coffee in DR Congo

・生産量(2018/19):34万袋(各60kg袋)estimate
 ・生産国ランキング(2018):第27位
 アフリカで2番目の面積を持ち、非常に資源豊かな国コンゴ民主共和国は、過去数十年、長らく続いた紛争や国内政治の腐敗などによって非常に荒廃したものになっていました。1980年代のピーク時には平均100,000-120,000トンものコーヒー(内80%はロブスタ種)を年間で輸出していました。
 しかしながら、その後の紛争により国内が荒れていくにつれ、コーヒー栽培を放棄し長らく手付かずになっていた農園も多く、生産者も年を重ね、またコーヒーの木も病気にかかり、生産量は落ち、一時は年間輸出量が5,000トンにまで落ちていました。

一方で、生産者たちはより高値で購入してもらえる近隣諸国へ密輸することなども多く、国内が落ち着き始める2000年頃のデータは確かなものではないかも知れません。
 その後、状況が次第に落ち着き始め、公共部門と民間部門の中で商業的な利益とそれに向けた規制緩和を求める声が多くなり、2015年には相互の合意がなされました。



合意の中身としては、抜本的な改革のため、輸出税と手数料に上限を設けること、政策の見直しや行政の冗長性の改善などと共に、公共部門と民間部門の利益を一致させるための協調的な取り組みが進められることとなりました。
 より具体的には、まずは近隣諸国への密輸を減らすために、生産性や品質の改善、また精製処理/水洗工場の改善などへの資金供給策へ対応することでした。尚、水洗工場に関しては、2011年には7つしかなかったものが、2018年には100もの水洗工場が稼働するようになっています。
 また、それまでも状況は少しずつ改善に向かっており、2012年のトップグレード(K3)のアラビカコーヒーの輸出量が8.94コンテナだったのに対して、2017年には39.12コンテナまで増えています。

その背景に団体やブランドが徐々に形作られてきたということもあります。

特徴的なものとしては女性団体 les Femmes Congolaises dans le Café & Cacao (IFCCA)があります。女性による女性のための団体で、その流れをくみ女性のみで栽培、収穫、精製、管理されている“Café Femme”というブランドも立ち上げられています。
 また、1965年に創業された Coffeelacなどは国内のコーヒーブランドとしても有名です。新しいところでは、2015年に創業のCafé Kivuや2017年に創業のLe Petit Chaletというコーヒーショップによって、国内消費の増加やコーヒーの品質に対する意識の向上にも貢献していることかと思えます。

尚、現在コーヒーで生計を立てている農家(生計のうちコーヒー関連の収入が一番ウェイトを占める農家)は25万人以上いるようです。
 そして、コーヒーの生産地については、主にコンゴ東部(Ituri, North Kivu, South Kivu)がメインになっています。

それぞれの生産エリア/ゾーンについて簡単に触れてみたいと思います。

Bord de Lac : キブ湖に沿って広がるこのエリアは年間平均気温が16.8℃、平均降水量が1,637mmであるだけでなく、標高が1,450~1,800mにもおよび、理想的な生育条件に恵まれています。一般的には穏やかな酸とトロピカルフルーツ、りんご、ジャスミン、チョコレート、オレンジ、ブラックベリーなどの風味を持っていると表現されます。また、24,000人以上のコーヒー農家が住んでおり、先述のCafé Femmeムーブメントの中心エリアとなっています。

Ruzizi : Ruzizi地域は16,118km²もの広大なエリアをカバーし、平均気温が21.6~26℃、年間降水量が981~1,549mm、標高が1,200~2,400m。ミディウムボディでレモンのような爽やかさやフローラルさ、トロピカルフルーツ、メロンの風味で知られています。

Grand Nord : North Kivuの北東部に位置するこちらのエリアはDRCの中でも最も生産量の多いゾーンの1つです。ルペロとベニという重要な商業都市が含まれ、24,579km²のエリアにまたがります。そして気温は16.9~23℃という比較的穏やかな気候に囲まれ、年間降水量の平均1,420~1,582mmです。標高は1,200~2,200mの範囲で、このエリアは世界的にもロブスタ種の生産でよく知られていましたが、近年は最高級のアラビカ種の生産で注目されています。ミディウムボディでトロピカルフルーツ、レモン、ハニーなどの風味特性を持っています。



Petit Nord : 豊かな粘土質の土壌と10,000km²以上のなだらかな丘陵が特長のこのゾーンは、コンゴ東部の観光センターの1つであるゴマ市の近くに位置しています。

そして、アフリカ最古のヴィルンガ国立公園に隣接しており、主要生産地への玄関口と呼ばれることがよくあります。

平均気温が18.9~21.7℃、年間降水量が1,185~1,596mm、標高も1,400~1,800mで恵まれた環境にあります。風味特性は滑らかなボディ、ブラックベリー、ブドウ、レモンなどで知られています。

Ituri : ウガンダと国境を接するアルバート湖の岸に沿った5,200km²の険しい山脈や深い谷にまたがるこのゾーンは、肥沃な粘土質の土壌でコンゴのユニークな特徴を生み出してくれています。生産環境は比較的温暖で年間平均気温は19.6℃、年間降水量は1,380mm、標高は1,600~1,900mでこれらの条件がコーヒーの品質と生産量の上昇に恩恵をもたらしています。



このようにコンゴ東部を中心としたコーヒー生産地の中で、バイヤーたちは、現地のしっかりと入り込み、包括的なトレーニングの実施やソーシングモデルの開発など、生産者と共に持続可能な形で品質向上に向けた取り組みを広く進めています。

次に、1つ特徴的な活動をご紹介します。

先述のCafé Femmeが取り組まれているのはムンガノ組合という南キブを中心に組織されている組合です。Twinという産地志向型のトレーダーは、2009年にムンガノ組合と長期的な取り組みを始めました。

目的は4つあります。1)グループの評価、2)Gender Action Learning Systems (GALS / 性別行動学習システム)の基本原則を含んだコミュニティメンバーの有機的な改善アクションプランの推進、3)内部統制システムの統合と強化、

4) Café Femmeのマーケット調査などの潜在的なサポートです。
結果としては、すべてにおいて満足のいくものとなっているようです。

このTwinの取組みによって生まれたコミュニティ内の変化はとても大きく、内部での継続性をもたらしました。それは世帯内でのジェンダーによる役割分担の解消や、5,000人近くまで拡大した生産者が、それぞれにオーガニック認証とフェアトレード認証の2つの認証を取得していることから内部統制システムが働いていることやトレーサビリティが守られていることがわかるかと思えます。

またコマーシャルマーケットの中で生産者と消費者の関係を構築しながら、結びつきを強くする創造的な方法に、Tip the Farmerというプラットフォームがあります。

Virunga Coffee Companyの国内での取組みに基づいて構築されたこのTip the Farmerは、消費者をより生産者に近づけるという共通ビジョンを持ったトレーダーやコーヒーショップが実現可能にしました。つまりコーヒーの販売時にアプリを通じて「チップ」として農家へ感謝を示すことができるのです。それは、トレーサビリティが確保されているがゆえに、実現される農家への直接的な還元につながります。

一方で、ELAN RDCというイギリスの支援プログラムは、コンゴ民主共和国国内でロジテック、マイクロファイナンス、教育、コーヒー/カカオなどの様々な分野で技術開発や技術支援などを行っています。

Congo Coffee AtlasもこのELAN RDCの取組みの一環で開発されたものです。これはコンゴのコーヒー業界に透明性をもたらしてくれます。オンライン上でダッシュボードを毎年更新し、買手は輸出統計、生産ゾーンの説明、カップिंगスコア、フレーバープロファイルの確認はもとより、生産組合に直接連絡を取ることもできます。



このようにTip the FarmerやCongo Coffee AtlasというITを活用したツールは、消費者、やバイヤーが生産者と結びつきを作り、その背景にはマーケットの透明性やトレーサビリティが担保されているという現状があります。

先述の団体以外にも、コーヒーのカンファレンス/品評会としてSaveur du Kivu、カカオやコーヒーなどの輸出協会l'Association des Exportateurs du Cacao et Café (ASSECCAF)、多くの途上国で技術支援などを行うTechnoServe、ハリウッドスター ベン・アフレックが立ち上げたEastern Congo Initiative (ECI)など、色々な組織がコンゴ国内で活動しています。

日本の関りでいうと、2007年にJICAのオフィスが首都キンシャサに設けられて以降、警察研修、浄水場の改修・拡張、保健人材開発支援、大学院医療機材整備、柔道スポーツ施設建設計画などがキンシャサを中心に取組まれています。

話は変わりますが、経済指標に関して少し触れてみたいと思います。

まず経済成長率は、2017年が3.7%。それに比べ、2018年は5.8% (世銀)と大きく躍進しています。そして、今後も年率6%前後の成長率が予測されており、国土、資源、新政権を考えるとポテンシャルの感じられる経済環境なのかも知れません。

2019年1月に新たに就任されたチセケディ大統領による政権運営で少しずつ安定した政策が行われるとの期待があります。アフリカ内外からも平和裏に行われた政権移行への支持が相次ぎ、民主主義の定着および経済開発の一層の進展への期待が高まっています。

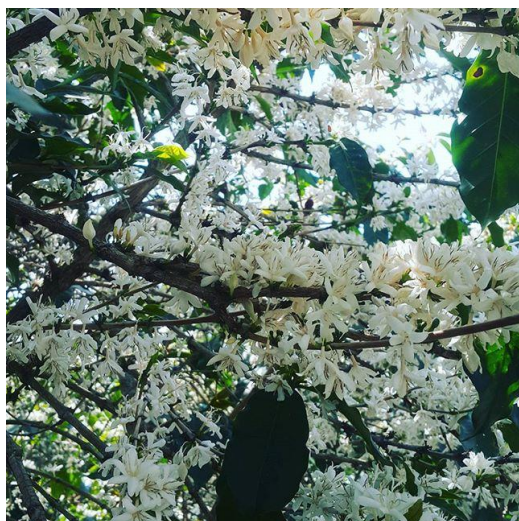
チセケディ大統領は貧困対策、福祉、雇用、教育、保健・衛生、インフラ整備などを優先施策とした国民の生活水準の向上、経済成長に向けた経済改革、法制度の改善、政治改革、財政刷新などへの対応を進めることに言及しているようです。

貧困率については、あまり多くのデータがありませんので、データの紹介にとどめておきますが、2012年、1日1.9ドル以下で生活する層は77%で、2018年でも73%とかなりの水準で高止まっているのが現状です。

雇用状況は、労働参加率(2013)男性73.2%: 女70.7%、失業率(2014) 男性6.7%:女性9.4%というデータがあがっています。

教育面は、中等教育卒業率：男児35.2%/女児18.0%(2012年)、成人識字率(2012)は男性91.2%,女性73.6%でいずれも100%未満です。

一方インフラ面でいえば、携帯電話普及率:53.0%(ITU World Telecommunication / ICT Indicators Database, 2016)というデータやインターネット加入率:1%以下(2014年)というデータが上がっていました。これらに関しては、そもそもプリペイド式携帯電話の利用が多い同国においては、プリペイド利用者が含まれていないなど、実態と乖離していると言えなくもないですが、今後の経済発展において、識字率、高等教育、インターネット普及率、などは気になる指標ではあります。そしてコンゴ国内の女性の社会進出に関する割合も、コーヒー産業のみならず重要な観点となってくるかと思えます。



最後に、国内の社会課題などへの取組みを進めている社会起業家をご紹介します。

《Jose Zefu Kimpalou (WapiMed)》 e-health service

WapiMedとはコンゴ民主共和国において医療機関とユーザーをつなぐ医療サービスサイトです。コンゴ民主共和国出身のJose Zefu Kimpalouにより、医療サービスを提供する人材や設備不足などの問題に取り組むために創られました。このサービスは他のサハラ以南の国々でも利用可能です。

それに加え、支払いに関しては、医療系オンラインペイメントシステムのMEDpayが対応しています。これを利用することで、他国にいる親族などが事前に支払いを行うことも可能であり、資金難で病院に行けないということが回避できるようになりました。

《Patricia Gieskes–Veringa (THE JOB FACTORY)》 job matching

コンゴ民主共和国で生まれ、オランダで育ったパトリシアは、現在、年35%もの成長率を誇る人材派遣会社の創業者として注目されています。

若者の失業率が上がる同国において、人材派遣会社はほとんどなかったようです。そのニッチな分野に目を付けたパトリシアは、立ち上げこそ国の法律などで手を焼いたものの、一度開業すると、若者の研修制度を含めて『適材適所』をモットーに人材のマッチングによる顧客満足度を高めています。

もちろん創業当時は、現地の雇用習慣が基本的には縁故によるものだということとのギャップに対して、優れた候補者を採用することについてのロジカルな説明を行う必要がありました。

現在は、多くの国際組織やグローバルカンパニー、地場の企業からの信頼を得て、コンゴ国内だけでなく、ルワンダやブルンジへの展開を検討しています。

最近では、WEBサイトから求人に応募ができるようになりました。また雇用主へのトレーニングや、若者へは大学で専門的なスキルを身につけさせ、そのスキルの活かせる業界と直接マッチングさせる取組みも行っています。

《Meni Mbugha (VIVUYA)》 Fashion Designer

デザイナーであるムブガさんは、コンゴ民主共和国の少数民族であるピグミー族の伝統的デザインにインスピレーションを受けた洋服を作っています。

彼は学校で美術を3年間学んだ後、コンゴ北東部の森で暮らすピグミー族の家族に出会い、デザインのヒントを得ました。また、ピグミー族の地位が向上した反面、彼らが未だに社会的に差別を受けることから、ファッションデザインを通し、ピグミー族を支援するプロジェクトを立ち上げました。

現在、キンシャサの芸術工科大学で講師を務める傍ら、エコでエシカルなファッションレーベルVIVUYAを通して少数民族の支援を進めています。また、レーベルの中から、NDURAというソーシャルプロジェクトを立ち上げ、次のファッションウィークに向けてEpuluに暮らすバンブティー族によって作られたエコファブリックの生産を進めています。

今回は3社の紹介にとどまてしまいましたが、その他にもスタートアップ企業など興味深い企業があるかと思えます。またの機会にご紹介させていただきます。